

連 載

予防医学という青い鳥（8）
メーテルリンクと生物種団の生き様、幸福の意味

青木 国雄

このシリーズの象徴テーマとした、メーテルリンクの「青い鳥」は、筆者、小学生の1930年代に、ラジオドラマで放送され、全国的に大きな感銘を与えた作品である。特に幸福の鳥は遠いところでなく、身近にあるという結びが脳に焼き付いている。戦後、昭和24年、再版（初版は昭和4年）された文庫本を再読して記憶を新たにしたが、その内容の深さを考える余裕はなく、戦後の思想混乱期でもあり、メーテルリンクが示唆ようとした人と地球環境の問題についてさえあまり気にとめなかった。

このシリーズを書き始めてから再度「青い鳥」を読み、内容の意味を取り違えていた部分や、彼の人生への思索、生き方へ示唆にふれて、深い感銘を受けた。それで、すでにこの青い鳥を熟読された読者には申し訳ないが、内容を簡潔に紹介しながら、メーテルリンクの現代での意義について考え、また予防医学という青い鳥の意味に就いて付記したい。原著紹介の理解や表現能力の足らざるところはご寛容をお願いする。

劇作「青い鳥」

主人公のチルチル（兄）とミチル（妹）は貧しい樵の子どもで、クリスマスイブに、今年はサンタさんからのプレゼントはないと母から言われ、眠りに入る。だが、長い夢を見る。二人は近所のお金持ちのクリスマスイブのパーティを覗き見、その美しくにぎやかなのに驚き、何ももらえないのに楽しみ、満足していた。そのとき、隣のばあさんに似た背中の曲がった老婆（妖婆と訳）がきて、病気の少女のために青い鳥を探してほしいと頼む。チルチルが飼っていた鳩は青い鳥でなかったからである。2人は病人のためなら、と引き受け、婆さんの家に行く。そこには、チルチルの愛犬、猫、それにパン、砂糖、水、火が妖精に化けてきており、人の言葉で話しかけてきた。彼らはお供をして1年後に帰ると死なねばならぬといわれたが、この旅のお供することになった。彼らは人の言葉が話せるのでうれしく、日ごろから人間に対して感じていること、受けた被害、進言したいことなどを折に触れて発言することになる。皆、用意

された意味深い衣装を着せられた。チルチルは大きなダイヤのついた緑の帽子かぶり、そのダイヤはまわすと周りが見え、もっと回すと未来がみえる魔法の目（叡智をしめす）であった。旅の案内は光の妖精がきてくれた。

まず思い出の国を通過した。霧の奥にあり、亡くなった祖父や祖母が昔のままの生活をし、2人を見て大変喜び、いつもお前たちの噂をしているという。死んだ3人の弟も生前のように遊んでいた。ここは好い処だからもっといなさいといわれたが、ご馳走を食べた上、近くにいた青い鳥も捕えたので、光との約束の時間だといって別れた。だが光にあうと、この青い鳥は黒くなり死んでいた。次に光は夜の御殿に連れて行った。美人の「夜の母」が番をしていた。猫は一足先に夜の母に会い、チルチルが魔法のダイヤを持って青い鳥を探しにくる。もし青い鳥が彼らの手にはいると、私たち生き物はすべて人間に利用され、もっとだめになってしまうので、青い鳥のいる奥の扉を開けないでと頼む。猫は人の横暴を憎み、青い鳥の捕獲には反対であった。チルチルが夜の母に部屋を開けてと頼んでも拒否された。しかし光の命令であり、ダイヤもあると聞いて、仕方なく「責任はもてないよ」と鍵を渡す。最初の部屋は幽霊、次の部屋は病人ばかり、次の部屋は「陰影：カゲ」「恐怖」「戦争」「怖い沈黙」などが閉じ込められており、気味が悪かった。また、仕事をしない星、香り、光る虫、露などもいた。最後に大戸があったが、夜の母が恐ろしいからもう帰りなという。皆逃げ腰だったがチルチルと犬は無理にこじ開けた。果たして青い鳥は沢山いた。皆でたくさんとったが、月光の上で輝く鳥は取れなかった。帰ろうとすると鳥はすべて死んでいた。

森には青い鳥がいるかもしれないと、光は森へ案内した。猫は先に行って、森の木々、花々に2人の子どもが青い鳥を取りにくる。それは困るので、彼らを撃退してほしいと頼む。犬は猫の陰謀をかぎつけて喧嘩をする。ミチルは知らずに犬を叱り、遠ざける。チルチルが森の木々に話かけると、長老の榎は「お前は樵の息子か。お前の父は我々の息子、叔父叔母、兄弟姉妹を1500本ほども切り倒し、孫などは1万2千本も切り殺した。随分悪いやつだ。お前の探す青い鳥は万物と幸福の大秘密だ。この秘密を手に入れ、お前はわれわれを奴隷にしようとしている。森はお前たちを追い払いたい」という。大喧嘩になり、犬が大活躍をするが、さんざんぶたれて困り、チルチルはあわててダイヤルを回して森から逃げた。

光は老婆から青い鳥は墓場にいるようだとの手紙を貰った。死んだ人が隠しているという。夜中にいって調べなさいという。皆嫌がったがチルチルと犬は行くといい、ミチルもこわごわ附いてゆく。光はこの魔の御殿周辺には、人の

「喜び」、「幸福」「運命の神の監督」などがいる。ただ隣は「不幸」が住み、その間に「正義」の丘や「永劫」からの風がふき、水蒸気のようなヴェールが立ち込めている。「幸福」の中には「大不幸」よりずっと危険なものもいるので気をつけよという。墓場は怖かったが、鳥はおらず、隣の幸福の御殿は華やかなで、たくさんのご馳走が並び、贅沢屋が飲んだり食ったりし、またごろごろ寝転がっているものも多い。恐ろしく太って、宝石を飾りたてた女がいる。その間で忙しく働く奴隷がいる。お菓子をつまもうとすると、光はあれを食べるとお前たちの決心が壊れる。目的のためには何でも犠牲にしてきっぱり断れという。そこへ「金持ちの贅沢」が代表で「地主の贅沢」、「満足した虚栄の贅沢」、「酒飲みの贅沢」「物を食べる贅沢」「何も知らない贅沢」「何も分からない贅沢」「何もしない贅沢」「眠る贅沢」「太った笑いの贅沢」などを紹介し、その上「青い鳥」は食べてもうまくないよという。そして皆さん、贅沢に飲み食いして幸福になろうよと誘惑する。チルチルはあわててダイヤルを廻し逃れる。次はきれいな部屋で、目覚めのバラ、水の微笑、東雲の青い衣装を羽織ったかわいらしい天使がたくさん眠りから覚めてやってきた。前にはもっと沢山いたが幸福が怪我をさせたと言はいう。もっとも幸福はあるが、人間には見えない。子どもの幸福、貧乏な幸福もあるが金持ちの幸福と区別がつかないと光はいう。その「幸福」がやってきて、「幸福なんてチルチルたちといつも一緒にいるよ。チルチルの家には幸福がどっさりあり、笑いや喜びをこさえるし、あなた方に尽くす幸福が一杯いる。「もっとニコニコと」、「御礼が言える」、「愉快」、「健康にする」などの幸福がいる。また「青い空気の幸福」「両親を愛する幸福」「森の幸福」「日向や日没、星、雨、冬の火、無邪気な考えの幸福」、また「正直、慰め、考える、物が分かる」幸福など一杯いる。もっとも、友達が悪く不幸になったものもいるね。この中で一番は「母の無常の喜び」（無我愛、犠牲愛）で、姿は母とそっくりである。「お前たちここにいたの、さがしていた。」と大喜び。チルチルはその着物の美しいのにビックリ、どこにあったのと聞くと「お前たちへのキスと抱っこ優しい顔つきで織ったのよ。日光と月光が着物をさしこにしたの」という。「幸福はいつも家に来ているけれど目に付かないものよ」という。母さんの目には星が一杯とチルチルはいう。そして「母さん一緒にここにしようよ」というと、「どこでも同じ、みなは下界にいるし、一緒にいれどこも天国。さあ帰りましょう」という。正義とか多くの喜びがチルチルたちを引き止めるが、もう時間がないといって、チルチルはダイヤルを回した。

光がきて最後に未来の国へ案内するという。ただ犬や猫などお供は未来を見ると死ぬので、部屋に閉じ込めた。

未来の王国は広大で、多くの子どもが長い青色のガウンを着ていた。光は、これから生まれる子どもたちで、出生をここで待っているという。子どもたちがやってきてチルチルトミチルにいろいろ問いかける。「帽子とは何」、「寒い」、「火」、「お金」、「金持ち」とはどういうこと、「涙は？」なに、などと聞く。何も知らない。人の死も分からない。ただ彼らは未来に備え、いろいろのものを持っている。ある者は33種類の薬、ある子は羽なしで飛べる機械、また、車輪、円盤、起動輪、滑車、調査器具などで、これらは出生後にこさえて使うのだという。また「大きな雛菊」、「大粒の葡萄」、「リンゴ」、「南瓜」も作るよという。中には「九星の王様の園丁になる」、「太陽系全体の同盟をつくる」、「死を減らす」という仕事をするという。一方「病気を持って生まれる子」、「生まれてすぐ死ぬ子」などもいる。ここには「時」のおじいさんがいて、時間が来ると戸を開けて、一人一人世の中に送り出すが、順番は決まっている。早く生まれたい子がひしめき、生まれたくない子、代わりに生まれたい子、忘れ物をしてとりに帰る子。隠れる子、仲良しと一緒に生まれたいができなくて嘆く子、別れたくない子達がいる。順番でなければ出してくれず、それも決まった数である。戸口はいつも押し合いへしあいである。時間が来て出生の船が離れる。すると母さんたちの赤子を迎えるうれしい歌声が聞こえてくる。隠れてみていたチルチルらは時のおじいさんに見つかり、あわててダイヤルをまわし、光と一諸に逃げる。光は青い鳥を捕え外套の下に隠した。しかしこれも死んでしまう。

気がつくときチルチルたちは家に帰っている。光は悲しそうにお別れのときが来たという。

できるだけ努力したが、青い鳥はとれなかった。もっていった籠にはなにもいなかった。別れの会が始まり、パンの妖精がお供を代表して御礼をいう。皆がよかったという。しかしもうこれで人の言葉ははなせないで悲しいという。二人に別れと感謝のキスをする。火も水も砂糖も皆別れを惜しむが、皆これからも私たちのような周囲のものを大事にしてねと2人に頼む。犬はこの旅の目的の邪魔をした猫をいためつけていたが、事情を知らないミチルが止めさせる。犬はチルチルといつまでも話し、もっとお助けしたいので別れはいやという。光は沈黙の国へ行くが、いつもみなをまもるよという。

家では寝坊助さんたちを母が起こしにくる。かわいいが怠け者にははいけないし、体にもよくない。「さあ、おきなさい」。チルチルは夢だと気づかず、「やっと母さんとあえてうれしい。1年も会えなかったから」という。母は「昨夜寝させ、今朝までここにいたのにおかしいよ」どうなったのかと父さんと声をかけ、医者をお呼びしようとする。そこへ、隣のおばあさんが来て、「夢の病でじきなお

ると」いう。そして病の少女にチルチルの鳥をかしてほしいという。チルチルが籠の鳥をみると、青い色になっている。チルチルは「さあ、おばあさん色が変わらぬうちに持って」といい、そして夢の続きを母にはなす。

やがて、おばあさんが、病気の子が青い鳥を見てよくなったと、うれしそうな女の子をつれて礼にやってきた。チルチルと少女が籠を開け閉めしているうちに、青い鳥は逃げてしまう。泣く女の子にチルチルはまた捕まえてあげるといい、「皆さんあの鳥を見かけたら返してくださいね。私たちの幸福のために」とさげふ。(終)

*

この劇の舞台装置、衣装はすべて作者が決めており、叡智の印にダイヤモンド、それに過去を案内にする光、人の生活に密着したパン、水、火、犬、猫を妖精として加えた。過去の国や宮殿の情景はすべて脚本にかかれ、見事である。あの世の生活、祖父母の愛情、人の世の闇の部分、人が生きるための自然破壊、墓場と幸福の隣り合わせ、幸福という不幸、青い鳥のはかない運命、これから生まれる子供たち。お供に人の言葉で会話させ、彼らも心があり、人の横暴とか、勝手気ままを批判させたり、猫の反逆を挿入したりして、子供に人の行動の矛盾を垣間見させている。動物の心も意識させている。

著者はこの世の闇、不幸や悲惨さを深く憂えていた。それで子どもの劇作を通し、悩みを一気に変えうる青い鳥を掲げて、解決を求めようとしたように思われる。

一見、たあいもない演劇で、振り付けや意味深い会話で惹きつけもしたが、やはり内容が、当時の暗い不安な欧州の人々の潜在意識に触れ、共感させたのであろう。好評で連続して各国で上演された。わが国では1913年翻訳され、その後上演され、ラジオドラマにもなった。たまたま目に付いた大佛次郎の戦争末期の随筆に、疎開できなかつた本の1冊に青い鳥があり、舞台衣装の図録があった。この美しい舞台を今の少年少女の工員たち(勤労働員の青少年のことか?)に見せたら、知らずことができたらと思った。子どもたちは「樵の家」を奪われ、「思い出の国」を失くし「未来の国」にも「夜の宮」も「森」も見えない。その代わりは紋切り型の必勝の信念の演説と激励なのだ。私も青い鳥を忘れており、昔は甘いと簡単に片付けてきたのは間違いだった。メーテルリンクはよい作品をおくってくれた。貴重なものと考え直したとある。空襲と疎開の機会が青い鳥の価値を発見させたのであった。

さて、「予防医学」は病気という不幸を未然に防ぎ、死や苦しみをふせぐ学問であり、幸福につながるものである。この世では、多くの病気の原因はごく身

近にあったのに、努力しても長く気づかず、犠牲者を出し続けてきた歴史がある。マラリヤと蚊、ノミやシラミとペストや発疹チフスなど、コレラと汚染された飲料水、日光とくる病、野菜不足と壊血病、脚気と白米食、タバコとがんなど、数えればきりが無い。大脳の大きな人類でも身近なものを見つけにくかった。20世紀の時代でも、タバコが肺がんの原因と疑われてから半世紀確認されず、疫学的に原因と判断されてから、世界中で積極的な対策が始められるのに30年から40年もかかった。人の習慣のうち本能や快楽、自己顕示と結びついたものは、知性の鏡をながく曇らせるからである。人間の行為は周辺環境にお構いなく勝手に発展している。その結果はまた人間の障害となり戻ってくる。ある病に予防法が見つかり、病が減少して恐怖がさると、すぐその恩恵を忘れ、共通と思われる予防の原則があってもしばしば実行しなくなる。青い鳥はすぐ色あせ、魅力がなくなるのに似ている。一方、自らが招いた新しい健康障害に、また予防の青い鳥探しに奔走せねばならない。この劇では同時に利他性、倫理性を重要視しているのも見逃せない。

メーテルリンクはどのような環境で育ち、どのような思想を持っていたのであろうか。筆者は彼の伝記は見つけることができなかったが、いくつかの著書を通し、要約すると以下のようなものである。

彼は1862年、現在のベルギーのフランドル地方、ガン（ゲント）の裕福な家に生まれた。彼の出生した頃は、アメリカの奴隷解放、パリの2月革命、英国の植民地拡大の時代で、戦争に継ぐ戦争の欧州であった。アジア、アフリカの植民地化が進み、遅れて日本もそれに参加した。時代を反映して、ロシアではトルストイ、ドストエフスキー、フランスではマラルメ、ミラボー、ランボー、リラダン、その他、イプセン、ショウペンハウエル、エマーソンらの思想的作家、詩人が輩出、またマルクス、エンゲルスらの社会経済体制批判、生物学では、ダーウインの進化論が衝撃をあたえ、マルサスの人口論が世をさわがせていた。自然環境では産業革命による都市構造の変化とそれに伴う環境汚染が激しくなり、急性、慢性伝染病の流行があいつぎ、衛生学が誕生し、微生物学が出現した。住民は所得格差の拡大以外に、戦争につぐ戦争で苦しんでいた。

フランドルは豊かな自然をもち、「ガン」は古くから栄えた町で、中世は修道院を中心に発達していた。スヘルデ、レイエの2河川が会う地域であり、交通の便もよく、物資に集積地としてまた織物の生産地として13～15世紀に

は欧州の主要な市場の一つであった。同時に学問、芸術も栄え、有名人が輩出している。ただ欧州の小さな地域であり、政治的にはフランス、オーストリアの支配下から、フランスを含めた大帝国スペインのフィリッペ2世の独裁をうけるようになり、住民は物質的にも、精神的にも強い圧力を受け続けていた。不満の住民は16世紀末に武装蜂起し、40余年の抗戦の後、1609年、オランダ連邦として独立を果たした。その後オランダ連邦は大きく興隆したが、17世紀に英国と利権を争い、戦争は互角に戦ったが、小国であり、英国の海上封鎖に悩まされ、不利な講和を結んで戦争を終えた。間もなく、陸上からフランス軍が襲撃し、敗れてオランダ全土はフランスに併合された。ナポレオン敗退後の1815年、再びオランダ王国が復興したが、ベルギーはその1領土となり、そのオランダの政治もベルギーには不利であった。1830年、フランスの政変時、住民が再び革命を起こし、オランダからの独立に成功し、欧州各国の政治的なバランスもあって承認された。国外から国王を迎えたが、国王は19世紀後半アフリカのコンゴを植民地同様にして利権をほしいままにしたので大きな怨嗟をかい、国民はコンゴを王個人ではなく国の植民地とした。その後もコンゴからは大きな利益がベルギーにもたらされ、国内産業も盛んで生活は向上した。非常に活動的な国民であったわけである。

彼はジェスイット系の中学をでて、ガン大学法学部を卒業、弁護士になったが、少年時代から好きだった文芸が捨てきれず、文筆活動に専念し、地元で創刊された「若きベルギー」に詩などに投稿し注目された。パリにでて優れた詩人たちと交流し、彼の作品集「温室」が国際的に有名になり、さらに詩、劇作に打ち込むようになった。この世の矛盾と文芸で戦おうとしたわけである。ただガンは田舎であり、創作活動に限界を感じ、思考が自由で優れた作家からの刺激が多いパリに住みついた。ベルギーは長く諸大国の占領下であり、しかも多人種からなる人口数百万の小国であり、周辺大国の強い圧力の下、いろいろな言動が制限されざるを得なかった背景もある。この世の不平等、社会悪、戦争災害の被害、悲惨な生活などを見聞き、経験し、それが彼の性格や文筆活動にかなりの影響をおよぼしたのではないかと考えている。

メーテルリンクは初期にはフランドルの伝統を継ぎ象徴派の詩人として登場、劇作にもそれが反映している。また劇作のなかにも倫理的、哲学的な思索が含まれ、随想や論評も高い評価を受けていた。その他、蜜蜂や花の生活と特異的な思考を加えた彼の博物文学はきわめて好評であった。そして1911年、ノーベル文学賞を受賞している。

彼の劇作は、人の世の闇を設定し、その闇は広く深い、人の叡智はその中

で光明をみつけ、解決の道を歩むという希望を描いたものが多いという。ミルボアはその劇作の内容についてベルギーのシエクスピアとさえよんでいる。当時の批評が覆刻され出版されているが、生存作家なのに大変なほめ方である。

彼が作家として世界的な名声を得た後、間もなく第一次世界大戦が始まり、ベルギーはもとより、フランスなど欧州は非常な被害をこうむった。彼は兵士として従軍志願するほどの熱情を持ち合わせていたが、許されなかった。彼は、平和で幸福に暮すにはどうしたらよいかと憂い、人類の生き様、将来を考えつづけていた。とくに生物には幸福がもっとも大きな生きがいと考え、劇作「青い鳥」でも中心的な話題としている。作品を通じて彼は、人の叡智こそ、この世の無知や諸悪、障害を取り除き、人ばかりでなく生物全体の明るい未来を開くと強く期待していた。

筆者は彼の劇作や詩の論評はできないが、彼の博物文学、蜜蜂、蟻の生活や、植物、花生体観察と論評には大きな感銘をうけた。そこに、彼の思想が凝縮されているようにも感じた。それで、無謀と思いながら、彼の博物文学を紹介しながら、青い鳥、幸福の意義を再考してみようと思い立った。現在、私共の周辺は生存の不安に満ちており、何か希望の手がかりでもと思ったからでもある。もっとも彼の博物学や進化の知識は、当時としては最も確からしいことを基礎にしているが、古典的であり、現在は、科学ことに分子生物学の画期的な進歩により、相当変わってきているので、専門家からは失笑されると思ったが、過去の時代に生きた筆者ら老人の考えや感じも、何かの参考になるかと思い、すこし長くなるが紹介と所感を述べたい。

1. 「蜜蜂の生活」1901年出版

蜜蜂は一匹の女王を中心に普通7~8万からなる蜂の集団が、王制共和国様の政治社会形態をとっている。女王はすべての子を産み、養育された蜜蜂は直ちに身分、職務分担を決められ、生涯忠実に仕事を続ける。殆どが働き蜂（雌蜂）で、春から秋まで身を惜しまず、智恵を絞って、蜜や花粉集めに奔走し、貯蔵する。住居係りは巣の建築、小部屋づくり、石工、ミツロウ作り、巣板作りの彫刻係りを分担、修繕にも驚くべき技能を持つ。きれい好きで住居の清掃はつねにゆきとどき、住居に送風し温度調節もする、汚物清掃のほか、死体の除去もすばやい。女王は侍女たちのきめ細やか世話をうけるが、自身は思うまま動けず、側近の指示のように卵をうみ続ける。卵、幼虫や蛹は世話係りの下で成長し、守衛は忠実に巣の出入りをチェックし、外敵には身捨てても防御にあたる。巣作りでも、突然の事故にあうと、実態を観察し、考え、補修、復元をす

る。なみなみならぬ知能を備えている。巣全体を維持するのに全力を上げ、自己犠牲的である。こうした忠実な行為自体には快樂が伴うのではないかと彼は推定している。

女王は象徴であり、すべての蜂が敬意を払い仕えるが、女王に自由は殆どない。義務の産卵も側近が導くまま分婭室（小部屋）に移動させられ、間断なく卵を産む。卵はほとんど受精した雌蜂で、生涯働き蜂であり、性器は萎縮している。時に大部屋に移動させられると雄蜂を少数生む。出産機能が低下すると、新しい女王が用意され、旧女王は世話蜂によりあの世へ送られる。次の世代も同様で、すべてが規則正しく、一瞬の休みもなくつづけられる。少数の雄蜂は働かず、気ままに食べ、放埒に遊んで暮らし、年に一度の結婚飛翔時に女王と交接する役目である。1匹が目的を達すればよく、残った雄蜂はすべて働き蜂に殺害される。

分封は危険な新社会作りであるが、蜜蜂の巣全体がその時期が来たと感じると、どんなよい巣の状態でも全員一致で分封を決議し、全人口の80%が分封のため古巣を捨てて旅立つ。そのときの巣全体の興奮と不安はものすごいと記述している。ただ、分封の成功率は高くなく、失敗すれば全員が死亡するというリスクをかけているからである。

これらの観察から、彼は、蜜蜂は独自の巣の「精神」により生き抜いている。蜜蜂は勤勉で、自己犠牲的であり、不屈の闘志をもち生き抜き、しかも和と寛容の精神や、智慧と先見性をそなえている。蜜蜂は小さい脳であるが、蜜蜂の舌、口、胃など全体に認識組織があり、思考、知性、悟性、理性、魂、精神などがあり、その行動をきめ細かく観察すると、いわゆる徳、愛、善などの美德を感ずるといっている。情報交換は何かホルモン様物質によるのではないかも推定している。

野生の蜜蜂は約4500種知られており、かなり原始的な生活の群から、現代の型までいろいろあり、比較してみると、やはり進化の跡がみられる。そして利己的で、不安定で不完全な生活の群は淘汰され、非利己的、友愛的であることが、種の存続につながったとしている。現在では、昆虫などのすべての行動は本能によるもので、利他性など知性は否定されているが、彼は知性を考えざるを得ないといっている。そしてこの純粹で無私無欲、独立不羈、高貴な魂をそなえた生物集団は進化の結果、長年生存するための道を見つけた。しかしこの選んだ道は、あまりにも個の犠牲が大きいと嘆いている。

この蜜蜂のある種は、18世紀に巣箱養蜂が發明され、以降、人により支配され、自然進化は中断されることになった。しかし最近10年間、この巣箱養蜂が

全滅する事件が増え、それがダニ、ウイルス、農薬の混合汚染の他、人為的な繰り返しの分封で種が均質化したのが原因と推定され、また蜜採取のため場所を移動しての過重な労働は、蜜蜂に大きなストレスを与えたといっている。すべて人間の欲の介入が絡んでいることである。蜜蜂にストレスという用語が使われることも、蜜蜂には心の世界が存在することを示唆している。

2. 「花の智慧」 1907年出版

この書では、植物は根で固定され、極めて限られた場所に拘束されるという過酷な条件下にあるのに、できる限りの叡智を絞って形態や機能を変え、狭い場所から、より広い空間に向かい生活圏をひろげてきた。そして地球全土を征服するかのように広がっている。植物は受容、忍耐、服従、瞑想という存在で、平穏な諦観の世界と見る人もあるが、すざまじい運命との戦いを勝ち取ってきたのだ。一例として、プロバンス地方の切り立ったがけに垂直に茂った樹齢百年の月桂樹の古木を描写している。不運にも垂直のがけに運ばれた種子が芽を出し、若木の枝は下向きに垂れ下がった。しかし枝は幹を空に向けるため、岩すれすれのところで枝を肘のような形に曲げ、頭をそらして上方に向かった。年々枝葉は大きく茂り、その重量は肘を肥大させて支え、肘部分は化け物のようになった。時がたって肘が重みに耐えなくなった頃、肘の上方、2フィートのところに2本の丈夫な根が生え出て、逆行して岩にとりつき、肘を支えた。これは驚きであった。木は何かを感じ、新しく伸びた根が古木を支えたのである。木にも知性があると考えざるを得ないという。困難を克服するため、信じられないような木の根の活動は他にも報告されている。

固定された木々がより広い空間に生きるには、枝葉の成長もさることながら、種子を周囲に広く散布する機能を発達させた。周知のように、プロペラ付きでとぶ種子、落下傘つき、また、莢を爆発させたり、噴出装置で遠く種子をとばす。鳥や動物の媒介で遠く撒き散らすなどの方法を考え出した。これらの装置は極めて巧妙につくられ、人が長く真似ができなかった器械、器具である。寄生という手段で繁殖する「つたかずら」もある。

多くの花々の花粉受精様式のからくりの妙は周知であるが、今でも人が真似のできないものもある。いくつかの花々、とくに蘭という華麗で、種類の多い花を例として、その花の構造や受粉システムの微妙な構造や、装置の改良ぶりを紹介している。現在は広く知られているが当時は多くの人々を驚嘆させたであろう。また花は予期せぬ事態にそなえて、人間の考えも及びつかなかった対応能力がある。それは適応という用語で表現されているが、むしろ極めて知的

といいうる。いままでの博物学者にはなかった考えである。

彼は、推察すると、この世には地球霊とでもいうべき魂があって、花々に能力を与えているのではないか。花の美しさの意義もまだ人には十分わかっていない。花は昆虫などを引き寄せるだけでない。著者は、花には他に好かれたい、他を楽しませたい、幸福であることを見せたいと望んでいるように見える。つまり、自然（地球霊）は美、歓喜、魅惑、美的好みを、花々をとおしてこの世に送りこんでいるのではないか。地球霊（造物の魂）は、情熱的に自然の精神的な向上を指向しているのではないか。そして、その知性は人と同じ方向にあり、また、宇宙の意志というものがこの世にあるのではないかといつている。最後に人はまだ花を完全に理解していない。特に花の香りの意義を理解していない。この香りという宝石の本質を正しく知る必要があると付け加えている。（香りに就いては近年多くの著書が出ている。）極度の制限の中で、困難さに打ち勝つ植物を描いて、その意義を知らせ、またしいたげられている人々に希望を与えたわけである。

昆虫や植物に比べ、自由の身である人はまだその生き方を完成させることができず、知性は徐々に現れてはいるが、未だ闇が多く、不幸が多い。この闇は、自然の示す微光を感じ取れば抜け出す道があるのではないか。植物や昆虫などから得られる生活史や彼らの感覚的な楽しみ、快楽も理解し感じ取る必要があると考えている。

*

青い鳥を出版、それが各国で上演され、世界的な好評を博し、ノーベル賞を受賞した3年後、第1次大戦が勃発した。ベルギー、フランスも戦場となり、1914年に戦争は終わったが、敗戦国も戦勝国も地域は荒廃し、経済的に破滅に近く、精神的に大きな打撃を受けた。不信、絶望、デカダンが流行病のように広がった。新しい秩序はなかなか出来上がらず、理想と希望を失った住民は欧州から新興国米国へ多くが移住した。

メーテルリンクは欧州に留まり、1926年に「白蟻の生活」を発表し、白蟻の運命を通し、生物の将来に大きな疑いや不安を述べながら、人類の将来への足がかりを探し求めている。

3. 「白蟻の生活」

白蟻は人類よりはるかに昔、地球上の熱帯、亜熱帯に現れ、順調に進化し、ひろがったと思われるが、200～300万年前、普通のアリとの生存競争に敗れ、地中にもぐって生活の場を確保するようになった。つまり、1度、生存競争に敗

れるという大打撃をうけ、再建して生き続ける白蟻の歴史、評論である。

白蟻は新しく、巣はすべて地下、闇の中に作った。巣はセメント様の堅い壁でかこいこみ、天敵とも言うべきアリが入れないようにした。巣は地下が中心であるが、洪水対策として、地上にも高さ5から10mに達する塔状のものを作った。この塔の外観はでこぼこの円筒形や、砂岩の泡型、キノコのお化け型、城の廢墟様建物であり、また麦束の山のような突出形を示す。巣が厳密に北をさす羅針盤型の建物もある。白蟻の中で大多数の盲目のハタラキ蟻が内側のみから住居の壁を作るので、外観は不規則になったわけである。巣の空間は自分の身長は何万倍もあり、中央に大寺院のようなドームをおき、その中に何万という蟻が住んでいる。この壁には数千の小さい穴があり換気をしている。寒さに弱い白蟻の巣は、植物の発酵により熱を作り、数百の通路による通風と換気で地中の室温を保っている。乾燥した熱帯でも、空気中の酸素と植物の水素から水を作り、湿度も保っている。卵は温度の高い上層で育てられ、下層には女王と王様がいる。女王はハタラキ蟻の2~3万倍大きいいが、殆ど自分で動けない。王もいるが、あまり目立った活動はしない。地下が深くなるほど成長した蟻が住み、食糧倉庫もある。地下道は数キロに渡るのも珍しくない。

食べ物は植物のセルロースである。消化能力をもたないが、体内に数種の寄生虫をもちそれが植物繊維を溶解、分解、その液体成分、蜜を栄養源として、貯蔵する。寄生虫を除去すれば蟻は死ぬ。ある種の白蟻はキノコを栽培して腐蝕した繊維から栄養を取る。

ハタラキ蟻は雄・雌があるが性器は萎縮し、性差に乏しく、盲目でセルロースの収集と消化を担当するが 無防備である。王や女王は目をもつが消化能力はなく、ハタラキ蟻から口移しで食事を受ける。糞も食料になり、巣の壁の漆喰にもなり堅固な障壁を作る。女王も普通の蟻も死ねば食料になり、食い尽くされ再利用される。つまり死の認識はない。部屋の壁は糞がセメントであるので、食糧不足の場合は壁をかじるといふ。完全に循環する食糧補給である。兵隊蟻も盲目で羽はなく、性器は萎縮しているが、頭は堅牢で、あごが大きく木などを容易に噛み砕く。頭に毒液噴霧器を持つものもある。食事はハタラキ蟻から口移しでうける。仲間を護衛し、忠実に敵と激しく戦うが、下半身は無防備なので普通のアリに容易に倒される。

その他複眼と羽をもち性器を備えた多数の青年の蟻がおり、彼らも食事をあたえられ育ち、やがて来る飛翔交尾期に備えている。飛翔時期になると巣の壁に小さな穴があけられ羽蟻は一斉に空中に飛び立つ。数百万の羽蟻が吹き出るので、もうもうたる蒸気様の柱がはるか上空まで立ち上る。このうち結婚に成

功するカップルは少なく、大部分は舞い落ち、鳥、爬虫類、犬、猫、アリ、トンボなどに食べられる。巣の穴はすぐに閉鎖されるので戻ることはできない。結婚に成功したカップルは森などにも新しい巣を作るようであるが、詳細は分かっていない。この時の羽蟻が大量に殺戮されねばならぬ意義も分かっていない。

女王は結婚飛翔後に、王と互いに羽をむしりとりあい、交接して産卵を始める。1秒に1個、年間2000万個生むといわれる。ハタラキ蟻が生まれると巣づくりが始まる。女王は多くの側近に囲まれ、愛撫され、なめられ、絶え間なく食物を流し込まれる。一方彼女は輸卵管から卵を流すので、それらを集め、洗い、運んだり、育てたりするハタラキ蟻がいる。同じような卵から、女王、兵隊蟻、ハタラキ蟻が生まれる。女王は4~5年絶え間なく卵を産むが、産卵力が落ちると、食物を補給されず、死んでゆく。死骸は食糧となる。白蟻の女王は蜜蜂と異なり複数いてもよく、かえって繁栄する巣もある。結婚飛翔をしない女王もあるが、ハタラキ蟻は生めないため、やがて巣は滅びてしまう。

白蟻は家屋の木材や森の木々を内部から食い荒らしたり、熱帯地方では村や森を短期間に食い尽くす事件が報道されている。それは恐るべき繁殖力と、破壊の手段を自ら開発したからである。缶詰のブリキは鉛の被膜を鑪で傷つけ、むき出しの鉄にさび液をかけ食い破る。鉛にも穴を開ける。ガラスはシリカを溶かす植物の液体をかけ腐食させる。額縁の中の版画でも食べる。白蟻は粘土のチューブの通路を作り日光をさえぎって獲物に接近するので、犯人の姿は目撃されない。ただ温度が低下すると生存は難しい。

白蟻社会の政治組織は王政共和国のようであるが、女王、王は側近の指示のまま活動し、眼の見える羽蟻も政治には無関係で、兵隊蟻も盲目で守衛と戦闘のみが役目である。ハタラキ蟻は奴隷のように働きつづけるが、管理者でもある。女王の産卵能力を見極めたり、兵隊蟻、羽蟻の数を調節したり、卵の未来、つまり、女王、兵隊、ハタラキ蟻などを区別し生ませる能力がある。ハタラキ蟻は農業、土方、石工、建築士、指物師、科学者、乳母、葬儀人すべてをおこなう。地下の囚人であるが、管理・支配者でもある。共和制というよりある種の民主制のようだと知っている。

こうした組織や機能は偶然というより、進化の過程で勝ち取った能力であり、こうした生命現象の起源や進化の意味、目的はだれにもわかっていないとしている。

彼は、白蟻の社会は完成されたものであり、それにより永久に生存できるように思われる反面、白蟻の生活は誠に厳しく、非情である。特に蜜蜂のように

すばらしく美しい季節を外界で楽しむこともできず、暗い地下で、盲目で、性の楽しみも放棄し、昼夜を問わず、働き、食べ物も限定されている。ただ巣をまもり、種の維持に献身するのに終始し、報いも少なく、世代交代する。兵隊蟻は守衛と戦争担当であるが、非常事態で出口が封鎖されるので、仲間の白蟻は、死ぬまで戦いぬく殉教者を見捨てるわけである。

巨大な建物、社会経済構造、分業、カースト制度、君主的な寡頭政治、食糧の効率的調達、化学、暖房、水の再生、多形現象（注：同じ種で異なる形態をもつハタラクキあり、兵隊アリ、女王、雄羽アリなどを意味する。）人類を数万年先行したようにみえる。なぜ脳が肥大しなかったのか問うている。

白蟻は普通のアリが出現するまではもっと優雅な生活であつたらしい。アリとの闘争に敗れ、生き残るため、土中にかくれ、羽、眼、性まで犠牲した。適応、進化というが、これなら一度種を死滅させ、新しくやり直したほうがよかつたのではないかといっている。また、白蟻や蜜蜂の運命は、人を含め、生物すべての運命を示唆するものであろうか。集団不滅とは何であろうか、それは人類に何を示唆するのかと問いかけている。

彼は、宇宙の創造主（地球霊）は、種の将来について何も考えていないのか。種は全体として完璧を目指して進化しているのに、なぜ完璧にならないのか。また蟻のように永遠の生命を希望すれば、今後も創造主（神）はそうした形（犠牲的な生き方）をのぞむのか。また、この世の時間と空間が無限で際限がないので、あらゆる経験が生かされずくりかえされるのを容認しているようであると嘆いている。一方、人では、価値を混乱させる原因は我々の肉体であり、肉体がなくなれば（改変されれば）、理想どおりに生き得るのか。もう10倍も賢い人ができれば、この秘密は明らかになるだろうか。また、人は神になるところであつた。しかし、神が被造物に幸福をあたえなければ、それはありえなかつたと考えるのが当然であるといっている。

人は物質により振り回されるが、精神の不滅の活力は測りがたいほど大きい。（この分では）結果として、行き着くところは、精神は虚無となり、アイデンティティは喪失、無意識となるかもしれない。これをさけるには、物質から生じた人の思考が、何も期待せず、漠然とした本能や遺伝的楽観主義が不可避であると考えて行動することになるのか。エピクテートス（ローマ時代 AD 55～139）は「事物本然の理を変えようと考えてはならない。それは可能でもなく、有益でもない。事物をあるがままに受け入れ、我々の心をそれに合わせずすべを学ぶべきではないか」、といっており、彼はこれ以上の結論はないと結んでいる。第一次大戦後の悲観的な時期であつたのであろう。

4. 「蟻の生活」1930年

白蟻との生存闘争を勝ち抜いて地球上により広く生息する「フタフシアリ」、
「ヤマアリ」を中心に記述している。広範な文献を展望し、その生態の特徴を
述べているが、他の書に詳しいので、簡略にすぎるが要点を紹介する。

現代の普通のアリの先祖は第三紀（7000 から 100 万年前）から出現したよう
で、長い間に穴居生活、樹上生活、昆虫食生活から変化し、アリマキなどの飼
育（牧畜）、キノコの栽培をもできるようになった。農業をはじめ、菜食が可能
になったことは、人類の進化の歴史に似ている。現代のアリは世界中に分布し、
地中に住居を定めたが、生活形態はきわめて合理的である。政治・社会組織、
役割分担、生活様式など驚くほどの工夫と改善がおこなわれたようである。

アリの巣は、女王、無数のハタラキアリ、数百匹の雄アリ（5～6週で死ぬ）
からなり、女王アリは約12年間、ハタラキアリ（雌雄の別なし）は3～4年
生きる。女王は1匹でなく、複数（2～15匹）で、連合したアリの巣ではさ
らに女王の数は多い。つまり多くの産卵者、統治者がいる。女王アリは単数で
も複数でも、アリ塚は一つの社会として機能してると考えたほうが理解しやす
い。また、アリは一匹一匹独立しているように見えるが、巣全体が人の臓器組
織のように機能し、同一の法則にしたがっているからであるという。

アリは小さく巧妙に作られ、下半身も丈夫で、極めて頑健である。わずかな
食糧で生存でき、断食に強い。筋肉や神経も圧縮されて備わり、強い筋力があ
り、重労働に耐え、苦痛にも強い。寒さには弱い、眠って時をまつ。人を電
子同志が接触するくらい圧縮すると数ミリメートル、つまりアリの大きさにな
るが、それは可能のようであるといっている。脳もそれに見合っているのであ
ろう。小さい体に極めて多くの優れた機能を備えているからである。

盲目に近いアリの情報伝達は触角の先端の7つの節にあり、臭覚ももつ。電
気、磁気を感じて情報を知り、それに心霊的な感覚もあるようである。アリの
三半器管はないが、姿勢感覚、筋肉感覚はあり、方向感覚は、内的記憶として
触覚、角度感覚、姿勢感覚、筋肉感覚がありそれで磁気を感じて行動すると考
えられている。アリにはリーダーがあり、その説得と理解のうえで、一糸乱れ
ず作業をする。知恵と情報を密接に交換し、民主的に運営されているが、長老
政治的でもある。相互愛、母性愛は人より強い感じである。

アリは働くばかりでなく、遊戯やスポーツをし、おめかしをし、休息もする。
遊んでいるアリもいる。看護や介護、死骸の後始末もする。特に他のアリの不
幸に関心をもつという特性があるが、回復しないアリは捨てられる。巣には健

康アリのみすんでいる。

アリは下腹部に社会袋というべき収容部分をもつが、そこには消化機能はなく、獲得した食物（殆どが液体であるが）をそこに蓄え、空腹になるとすこし胃に入り、えさとなる。アリの一群はこのえさ袋を一杯とし、巣の奥の天井にぶら下がり自分自身が貯蔵庫になる。他のアリはそこへ蜜を運び、時には食物（貯蔵アリが反芻した吐物、蜜）をもらう。反吐した蜜（食物）は、卵、幼虫、蛹、仲間などすべてに与えられる。反吐には快楽が付きまとうようであるといっている。ハタラキアリはわずかの食物でいきまわり、断食でも数週間湿気だけで生きている。兵隊アリも口移しでこの蜜を貰う。敵にも与えることがある。この蜜は寄食する他の昆虫にも供与される。原則としてアリは愛他主義であるとしている。

一般的なアリの巣は地下に無数の枝分かれした通路を作り、住居は多層部の部屋からなり、部屋の温度により使用目的が異なり、育児室、倉庫、穀物置き場、公会堂があり、キノコ栽培室、家畜小屋、酒蔵などもつくる。大きな巣は200を越す集合で人口は5000から50万、ふつう大きな巣は半径200kmに及ぶが、再大は20平方kmに達したという。

ハタラキアリは家事の掃除や食事（野菜、穀類、果実、飲み物、獲物、ひき肉、練り粉、粥をつくる）、通路の修理、母アリへの奉仕、保護、愛撫がある。卵、幼虫、蛹には献身的に世話をする。餌の獲得以外、母アリの世話、幼虫の養育、キノコ栽培、家畜の飼育、放牧などの産業のほか、軍事行動に備える。アリの協力態勢はすばやく組織される

アリはアリマキを飼育して甘い汁を得、またキノコを栽培したべる。これには木の葉を刻んで、咀嚼し、捏ね、固め、腹部からの排泄物や殿粉などで発酵させ腐葉土を作る。胞子をまき、地下農園の苗床をつくる。野外で園芸をするアリもいる。穀物を倉に運びいれ冬の食糧にするアリもいる。林業アリは葉を集め、紡績アリの幼虫から繭を引き出し、巣を作る。そのほか驚くような能力が記載されている。

アリの仕事分担は天性、能力で決められるようであり、時には指導者の命令できめられた仕事を忠実にこなす。砂漠のアリは砂運びに適したヘラや匙様の頭をそなえている。守衛アリの頭部は門の形をし、頭でしっかり入り口をふさぐ。消防アリは、蟻酸を発射し消火する。害虫を食べて森林を守っているアリもいる。

アリは原則として平和主義者であるが、戦争はいとわれない。防御も強固である。軍隊を組織し攻撃をする種もあるが、体型、体色、身長が異なり、胸に鎧

や武器をつけるとか、顎が大きく鋭くとがった牙とか、首や足を引きちぎる構造もある。毒液を持つアリは少ないが、肛門に毒ガス噴霧器をもつものもある。戦争方法もいろいろで、組織的で人間とあまり変わらない。戦場では軽症者は看護するが、重症者は、見捨てるという。博愛が普遍的で、敵も看病する。一方略奪した子どもを奴隷にするアリもある。奴隷の反乱もあれば、奴隷にすべて任せて滅びるアリの巣もある。戦争だけではなく話し合いで和解し、共存する特性がある。いろいろな災害、妨害にあっても、興奮することなく対応し、最低の犠牲で切り抜ける。

アリが苦痛よりも快樂に敏感で、幸福には積極的で、能動的であることに注目している。義務を果すのも喜びのようである。アリは不死性をえらび、自らの神に仕え、自我を忘却し、自己を滅却する以外、幸福も存在も認めないというトーテミズムにそまっているようにみえる。集団としても他を幸福にしようとする。また寛容である。彼は、アリは高貴な種であるといっている。

一方、アリの中にも寄生アリがいて、巣から卵を奪ってたべていきるものもある。また女王を殺して居座るアリもいる。ハタラキアリを生まないアリの女王は他のアリの巣に忍び込み、歓待されて卵を産み続けることもある。養子になるアリもいる。その他食客、泥棒、ペテン師 arī もいる。彼らの体からはエーテル様の分泌物を出すので、他の種のアリが中毒になったり、愛撫が上手であるので、自分の女王を殺して新しい女王に仕えるようになるという。つまり、人間社会に似た現象が見られるわけである。

全体的に見て、アリは今日地球上でもっとも進んだ生物の一つであり、何百万年も目立った進化をしていないようにみえるが、6000種ものアリを比較すると原始的なアリも存在しており、進化があり、現在の状態になったのであろう。

一方、アリとくらべ、人の生活はどちらがより耐えやすく、より無意味で、より有意義なのかとメーテルリンクは疑問を投げかけている。人の世界を見る限り、問題が多く、今後、多くの発見や啓示があっても、人の魂と体を改良したり、変形させない限り、相克は絶えず、人の苦痛の種は増えるばかりである。人は不死の望みはなく、人は利己的であるだけに、心は乱れやすく、頼りの愛の力は人の世界を支えるほど強くはない。常に不確定で矛盾に満ち、先が見えない。蜜蜂やアリは人間より遥か以前に地球で生活を始めているだけに、人は、彼らに続く自然の実験対象になっているのだろうか。とすれば将来はそれほど安心できるものではない。人はまだ知識や知性の未熟のため 不死の確認はできない。人のあらゆる経験、あらゆる努力の結果をみても、諸悪や悲惨、苦痛への戦、物質との闘争、すべての成果を蓄積する空間はどこにもなく、いつと

はなしに失われる。

ただ親、子、孫へ受け継がれる本能や知性はある、そこに期待がもたれる。常に不満を持ち、不足を嘆くが、改善を強く願う特性があり、これが他の生物と異なるところであり、そうした知性、叡智による対応で、アリとは別の方向を辿るのであろう。それが宇宙的不死へつながればと、悲観的ではあるが望みを託している。

もともと、こうした次元の異なる生物間の比較は科学者にはナンセンスと映ったようである。最近まで、人の脳の進化は異常に大きく、巨大な脳神経系を持つ人の知性とか行動を昆虫類などと対等に比較することは絶無に近かった。また、進化論における、唯物論と造物主（神）の問題は、ダーウィン以来長く激しく論議されてきており、その批判は筆者にはできないが、進化の論議の中で、唯物論派が、造物主は盲目の時計職人といっている。これは唯物論的には相応した表現であろうが、説明しがたい現象を例として多くの反論もある。たとえば、遺伝的適応性や複雑性はすべてデザインされた結果であり、デザインなしでは何も進行しない。デザインは造物主（神）を考えたほうが理解しやすいと言っている。アインシュタインが愛の神という考えを持っていることを知って筆者は驚いた次第である。

進化論学者のルースは彼の著書の末尾に、神学者で博物家のレビンの言を引用している。「自然は美であり、・・・それは人に喜びを与え、人を謙虚にし、無作為や無目的、功利的や唯物論的という言葉で意味されるすべての物事からかけ離れた美であり、その衝撃と印象が神との真の邂逅にも匹敵する美である」という内容である。メーテルリンク的な考えは依然として生き残っていることを知った。

ドブジャンスキーは人類が「自分を自覚した」ことは大事件であり、それは死の意味を知ったことである。ネアンデルタール人は約8万年前、先祖を埋葬している。これは死を自覚したことで、神秘の闇を開いたとローレンツは指摘し、極めてまれな確率事象であり、この過程が後の人類発展の基礎になったという。エックルスは、この進化（変化）自体は神の存在を考えざるをえない出来事ではないかと述べているという。

筆者は、人と昆虫の脳神経機能を比較した論文が、前世紀期末から出始め、最近の分子生物学的な分析方法の進展により、さらに詳細に昆虫類の脳神経機能や生活能力に就いての知見が発表されていることを知った。それによれば、昆虫は地球上で人類と並んで進化の戦いを勝ち取ったという記述がある。現在進展中の研究であるが、水波の報告から要約すると以下のようなものである。

昆虫の脳神経系を精力的に研究すると、その構造が人間極めて類似している。遺伝子でもボデイ・プラン遺伝子、眼、心臓、生物時計、中枢神経系の形成に関する遺伝子は同じである。昆虫の脳は1立方ミリメートルに過ぎないが、この小さい脳に驚くべき巧妙な仕組みがぎっしりつまっていて、自然が生んだ至高の智慧を持つという。水波は1996年、昆虫らの脳に「微小脳」という命名を提唱し、国際的に認められている。昆虫のような外骨格をもった脳のニューロンは100万またはそれ以下であり、人の1000億とは桁違いであるが、生存には十分としている。これは人の脳は超大型コンピューターであるが、アリの脳はノートパソコンに匹敵する機能がある。人でもノートパソコンは、実際の生活には十分であるように、昆虫はこれをフルに活用して生きている。昆虫には、重要な情報を精密ではないが早く受け取り、伝達し、行動することが必要である。これを1つのニューロンで多くの情報を処理する。視覚系も人ほど細密に見えないが、外敵やえさを見つけるには十分で、すばやく飛び回りながらもキャチし、すばやく末梢で処理、対応している。そうでなければ生存できない。また脳には連合系とおもわれるキノコ体があり。この機能はまだ十分分かっていないが、立体的にもものを捉える機能は備えている。昆虫は学習もでき、条件反射もあり、記憶の蓄積も時間の認識もできる。短命であるのでそれほど大量の情報は必要がないので小型の装置で十分である。しばしば新しい行動をとることが観察されており、記憶を喚起し新しい判断をしているようである。こうした記憶の蓄積はある意味で、心にあたる世界も持つ可能性がある。

人は情報を精密に捉え、膨大な記憶を脳に貯蔵できるが、その反応は早くはない。また照合に時間がかかり、判断もすぐにはできないことが多い。それは広く大きな立場から判断し、柔軟に対応せねばならないからである。長い人生にはいろいろな機能と情報の蓄積、処理、判断が必要であるからである。体が大きいだけアリや蜜蜂のように早くは行動できない。また、自身で対応できず、しばしば外部の装置を使わねばならない。

テキサス大学のピアンカは、生物には2大繁殖戦略があり、不安定な環境に生息する種で、体が小さく、世代時間が短く、固体数が多く、多産を特徴とする群（昆虫など）と、安定した環境で、体が大きく、世代時間がながく、個体数が少ない、少産で環境資源を有効に利用する能力の高い群（人類）がある。環境の変化にたいし、前者は短期間に多くの変異を生み出し、また学習により対応する。後者は成人までの発育期間を長くし、学習期間を長くし、また繰り返すにより能力を高める。長い進化の過程でみると、カンブリア期の新口動物からは脊椎動物が進化し、人に到ったが、後口動物としては節足動物が進化し

現在に至っているという。マイヤーは動物のうち、食う、食われない、子孫を残す という3つの特性がこの2群に共通であるとして、人類と昆虫類の行動の共通性に示唆を与えている。一方人の脳はきわめて大きくなり、神に近いほどの能力を獲得し、他の生物を圧倒しているが、それには不均衡と危うさが付きまとっている。

種はそれぞれに異なる生き方を実現するために設計されており、どちらが優れているかは簡単には言い切れないと水波はいう。

メーテルリンクがこの微小脳の研究を知ればどれほど喜ぶことであろうかと想像している。それにしてもメーテルリンクの優れた観察と鋭い洞察には驚くほかはない。そして、彼が、心をもった生物には、幸福が必要であり、幸福なしには生きる価値がないという考えたことは極めて重要と再確認した。

「ガイア」、つまり、生物はその環境と一つに結合したシステムとして進化し、現在の生物相にもかかわらず、気候や化学環境が自己制御されるという考えが広まっている。いろいろ批判はあるが、人と他の生物、環境を、広い立場での配慮しながらの生存を考えねばならない時代に入り、あらためてメーテルリンクに学ぶことも多いと考えている。

メーテルリンクの作品は日本でも多く紹介され、演劇でも上演され、いろいろの影響を残したであろう。しかし、大佛次郎の回顧のように、大部分、美しい甘い物語と受け取っていたのであろうか。当時1910年から30年代は、日本は富国強兵政策で、追いつけ負い越せの時代であり、一方、これらの政策に反対する社会主義が盛んになったが、間もなく弾圧された時代であった。したがって、過激でなく、人間の存在と意義、人類の幸福や将来を考える作家、それも象徴的な表現の作品に就いて、関心を持つ余裕はなかったかもしれない。

参考文献

- 1) メーテルリンク：若月紫蘭訳 青い鳥 岩波文庫 昭和25年 第21版
- 2) モーリス・メーテルリンク：山下知夫、橋本 網訳： 蜜蜂の生活 工作舎 改訂第1版 2000
- 3) 大佛次郎：忘れていた本（文芸春秋 昭和20年10月号）；昭和20年の「文芸春秋」
243-245 文春文庫 2008
- 4) モーリス・メーテルリンク：高尾 歩訳： 花の智慧 工作舎 1992
- 5) 同、尾崎 和郎訳：白蟻の生活 工作舎 改訂版 2000
- 6) 同、田中 義廣訳：蟻の生活 工作舎 改訂版 2000

- 7) 同、高尾 歩訳：ガラス蜘蛛 工作舎 2008
- 8) 栗原 福也監修：オランダ・ベルギー 新潮社 1995
- 9) 世界地理風俗大系 18巻 イギリス、ベネルクス 誠文堂新光社 1964
- 10) E. Thomas: Maurice Maeterlinck New York, DODD, MEAD and Co. 1911
Kessinger Publishing's Rare Reprints USA
- 11) E. Hubbard: Maurice Maeterlinck Pamphlet, from hundred-Point-Men:
Elbert Hubbard's Selected Writings Part 10, Kessinger Publishing's
Rare Peprints USA
- 12) Jacobsen R. 中里京子訳、福間伸一解説：ハチはなぜ大量死したか 文芸
春秋 2009 (Fruitless Fall, 2008)
- 13) Heineich B: 渡辺政隆、榊原充隆訳 熱血昆虫記 虫たちの生き残り作戦 ど
うぶつ社 2000 (The Thermal Warriors Strategies of Insect Survival
1996)
- 14) Ruse M: 佐倉 続、土 明文、矢島荘平訳 ダーウィンとデザイン 進化に
目的はあるのか? 共立出版 2008 (Darwin and Design Does evolution
have a purpose 2003)
- 15) 水波 誠：昆虫 — 驚異の微小脳 中公新書 2006
- 16) 中原英臣、佐川 峻：進化論が変わる ゲノムの時代にダーウィン進化論
は生き残るか ブルーバックス 講談社 2008
- 17) Wilkinson, DM.、金子信博訳：生物多様な星の作り方 生態学からみた地球
システム 東海大学出版会 2009 (Orininal: Fundamental Processes in
Ecology on Erth Sstem Approach, Oxford Univ. Press 2006)

(名古屋大学名誉教授、愛知県がんセンター名誉総長)